

Wordsworth と花

添 田 透

自然をこよなく愛し、自然と共に生き、自然の中に溶け込んだ、そういう面を持つ Wordsworth に自然詩人という名称を与えることも、一面では正当と云えよう。

千紫万紅たる花は古今東西を問わず、その取扱いに差こそあれ詩人たるもののその詩心の対象としてきたものである。勿論 Wordsworth とて例外ではない。しかしある花の前に彼が立つだけではそれは価値のない自然現象でしかありえない。たとえ、時にそれが伝統にのっとった把握であるにせよ、その花を思念してはじめてその花は物質界の花から彼独自の詩の世界の花になるのである。

本研究は Wordsworth の作品にあらわれた花のうち意義を看取しえる一部の主なるものを選び、時にその表出する詩的内容を検討し、Wordsworth の花に対する態度を考察したものである。

先ず *Roses, of all the flowers the king* から入っていきたい。バラは英国の National Emblem であることから国の象徴としての使用が見受けられる。

The Rose of England suffers blight,
The Flower has drooped, the Isle's delight;
Flower and bud together fall;
A Nation's hopes lie crushed in Claremont's desolate Hall.¹⁾

1) *Ode on the Installation of His Royal Highness Prince Albert as Chancellor of the University of Cambridge, July, 1847*, 21—24.

上記のバラが国の勢力を象徴していることは明白である。一方世界中の国々が明るい将来の希望に充ちていたが、楽園の花園にいるときに経験されるであろうような image で云えば、それは咲きはこるバラの上に更に蕾をつけたかのように美しい希望であったという次のような表現がある。

Not favour'd spots alone, but the whole earth
 The beauty wore of promise, that which sets,
 To take an image which was felt, no doubt,
 Among the bowers of paradise itself,
 The budding rose above the rose full blown.²⁾

これは革命の初期に、近い将来生まれるであろう国家を夢想し楽しい心境にひたっていた頃を回想した所である。このように一般的に云ってバラには暗い image はつきまとわない。美の象徴としてバラが用いられてきたことは Shakespeare を持ち出すまでもなく我々の既に知るところである。Wordsworth にとってもバラは初夏の先駆であり、他の花より華やかさを強調するものとうつつたらしく “proffered beauty”⁴⁾ との名称を与えており、この花を見た人の胸は “joyful pride” で一杯になり喜びを感じるにちがいないと述べている⁵⁾。このようなバラが更に如何に詩中で展開されているかを今少し述べてみたい。先づ目につくのは色彩と関連づけての使用である。即ち早朝の白雪を戴く山頂がバラ色に染まっていることを描写している次のような写実的表現を見出す。

—’Tis morn : with gold the verdant mountain glows,
 More high, the snowy peaks with hues of rose.⁶⁾

2) *The Prelude*, X, 702—705.

3) Cf. *Sonnet*, LIV, 3—4.

4) *St Bees' Heads*, 5.

5) Cf. *Loving and Liking*, 32.

6) *Descriptive Sketches (1793)*, 492—493.

更に我々はバラといえば頬の色の比喩的表現を連想するが一般にイギリスの詩人は恥らいから少女が頬を染める時, damask のほんのりとした色を連想する。Wordsworth も又例外ではない。即ち子供の頬の新鮮な美しい色を表現している“Her infant's cheeks with fresher roses glow…”⁷⁾ がそうであり, “…the rose/Of infancy first blooms upon his cheek…”⁸⁾ もしかりである。又この種のバラの使用に類似するものとして乙女の性情を示す形容語として用いられている場合もある。

When she I loved looked every day
Fresh as a rose in June,
I to her cottage bent my way,
Beneath an evening-moon.⁹⁾

詩人の愛した Lucy はいつも 6 月のバラの花のように新鮮に見えたのである。英国の 6 月は生命の息吹きを旺盛に感じさせる季節であるが, 「6 月という初夏のバラ」との simile を用いての簡潔な表現は, たとえ, その動機が Percy の *Reliques of Ancient English Poetry* の *Dulcina* からの借用であろうと Lucy の持つ澁潤たる新鮮さを表現するのに最もふさわしいものと感じられるのである。同じく女性の明朗さを示す為に用いられた比喻としてバラ色に染った東方の夜明けの空よりも彼女は明るいという “…Brighter than eastern skies at daybreak strewn / With fancied roses…”¹⁰⁾ とか “Lovely as Spring's first rose”¹¹⁾ とかがある。更には女性の胸に抱えられている香気漂うバラになりたいという love-sick の若者の言葉 “Change me, some God, into that breathing rose!”¹²⁾ のように愛との関連において用いられてい

7) *Descriptive Sketches* (1793), 734.

8) *The Excursion*, V, 957—958.

9) “Strange fits of passion have I known,” 5—8.

10) *Ecclesiastical Sonnets*, Part II, XXV, 6—7.

11) *The Borderers*, 455.

12) *The River Duddon*, VII, 1.

る場合もあった。又バラ戦争の名残りである “roses… red and white” も *Song at the Feast of Brougham Castle* (1.5) に見出せた。バラの使用方法を分類してみると、修辭的表現は14例、写實的表現が29例となった。

さて次にバラと並んで花の二王とも云われているユリ (lily) をみていきたい。尚この項ではスズランの lily of the valley, スイレンの water lily をも含めて述べていく。先ずユリはバラと並列して用いられていることが多い。

Spring finds not here a melancholy breast,

.....

Nor flaunting Summer—when he throws

His soul into the briar-rose ;

Or calls the lily from her sleep

Prolonged beneath the bordering deep. . . ¹³⁾

即ち見るもの総て快い地方においては夏がバラに心を入れ、ユリを眠りから覚ますというのである。この場合バラはあでやかさ、ユリは清純さを示し、両者を対比させることにより詩的効果をもりあげているのであるが、いずれにせよ、両者が夏の花の王者を意味していることは間違いあるまい。同様な表現としては

How he glories, when he sees

Roses, lilies, side by side… ¹⁴⁾

とか、バラとユリが各々美と莊嚴を象徴している “Did wanton fawn and kid forbear / The half-blown rose, the lily spare? ¹⁵⁾” とか可成り沢山見出

13) *The Brownie's Cell*, 81—88.

14) *To a Sexton*, 18—19.

15) *Flower Garden*, 11—12.

せた。一般にこのバラとユリが対比して用いられる場合は前記のようにバラは愛、美、熱気、輝き、日光を象徴するのに対し、ユリは純粹、莊嚴、靈光、薄光、月光を象徴しているようである。この意味を持つユリの例としては家を顧みない父の為身投げする7人の純粹で愛情こまやかな寂しい迄の美しさを持つ姉妹を“seven lilies”と呼んだりしている。¹⁶⁾ところで下記の詩行、

A solitary Doe!

White she is as lily of June,

And beauteous as the silver moon

When out of sight the clouds are driven

And she is left alone in heaven. . .¹⁷⁾

及び、これ迄少し述べてきたところから理解し得ることであるが、一般にユリの名を聞いて英国人が先ず頭に思い浮べるものは白いユリであると云われている。これには天使 Gabriel が、この花を聖母 Mary に捧げたことにより、この花が chastity, innocence, purity の象徴と見做されてきたとの由来があり、この連想からこの花を詩中に用いることが多いと云われる。¹⁸⁾ Wordsworth も又、この意識無きにしもあらずであろう。尚 “...pure—/As snowdrop on an infant’s grave, / Or lily heaving with the wave...”¹⁹⁾ におけるスイレンも又人生の純粹性を象徴するものとして使用されているが特にこの花の場合 purity of heart を象徴する場合に多く現われているようである。この花も Wordsworth が “This plant (water lily) has been my delight from my boyhood...”²⁰⁾ と述べているように彼の性格に合った花の一つであった。

16) Cf. *The Seven Sisters*.

17) *The White Doe of Rylstone*, 58—62.

18) 石川林四郎, 「英文学に現れたる花の研究」(東京: 研究社, 大正13年)の「Lilyの項」参照.

19) “O For a dirge!,” 42—44.

20) Cf. E. de Selincourt, ed., *The Poetical Works of W. Wordsworth* (Oxford: Clarendon Press, 1954), III, 502, (尚引用文中の()は著者による).

この他にユリはフランスの National Emblem であることから “Conquer the Gallic lily…”²¹⁾ とかフランス革命と恐怖政治の暗さを暗示している “As despot courts… / The lily of domestic joy decay”²²⁾ 等の描写も見受けられた。使用法としては修辭的表現が12例、写實的表現が14例となった。

次に英国の野生の草花のうちで一流と云われているサクラソウ (primrose) に移りたい。サクラソウはものの蔭など湿気のある所に春に先だち咲き、夏を待たずに枯れる為、そのはかなく淋しいあわれな風情に多くの詩人達は魅了された花である。Wordsworth も “…the rathe primrose as it dies / Forsaken’ in the shade!”²³⁾ とか

Primroses, the Spring may love them—
Summer knows but little of them…²⁴⁾

とその薄命をうたっている。この他この伝統的な春を象徴する花として上記の感情を込めた描写が多く見受けられた。

But ’twas not long
Ere the interrupted stream broke forth once more,
And flow’d awhile in strength, then stopp’d for years;
Not heard again until a little space
Before last primrose-time.²⁵⁾

上記の詩行は1799年以後 *The Prelude* の執筆が1804年のはじめ頃迄ほとんど停止状態であったその間の事情を説明している箇所である。サクラソウの

21) *Ecclesiastical Sonnets*, Part II, XV, 7.

22) *Descriptive Sketches* (1793), 721—723.

23) *To May*, 59—60.

24) *Foresight*, 17—18.

25) *The Prelude*, VII, 9—13.

持つ淡黄色からすれば“primrose-time”は白い冬と緑の春の中間とでも譬えられよう。OED では比喩的に“the time of early youth”となっているが、再執筆にとりかかった1804年2月のはじめ頃を示すのに最適の抒情的表現ではなからうか。

In vain, through every changeful year,
 Did Nature lead him as before ;
 A primrose by a river's brim
 A yellow primrose was to him,
 And it was nothing more.²⁶⁾

これは陶器の行商人 Peter Bell の性格を示す一例である。このサクラソウの使用は一見写実的であるが、その伝統的意味を越え、極めて放埒で野性に富み自然美に鈍感な、そして勿論自然の靈感を感じ得ぬ頑な精神の持主であった時のPeter Bellの性格を効果的に表現していると思える。この種の例は人の世の醜さに対して、自然の美しさを現わす為に *In Early Spring* にも用いられている。この花自身の特徴を表わす詩行としては

Blithe of heart, from week to week
 Thou (celandine) dost play at hide-and-seek ;
 While the patient primrose sits
 Like a beggar in the cold…²⁷⁾

がある。クサノオウ (celandine) が来るべき喜びの象徴である一方このサクラソウはじっと我が世の来るのを忍耐強く待つ姿を示している。²⁸⁾

この他、失恋の女性の象徴とも考えられる“lonely Primrose”とか“…coy

26) *Peter Bell*, 246—250.

27) “Pleasures newly found are sweet,” 33—36, (尚 () は著者による)。

28) *The River Duddon*, XXII, 13.

Primrose to that Rock / The vernal breeze invites.”²⁹⁾ のように coy で lonely であるが年々の funeral をおそれぬ花との表現もあった。7 例の修辭的表現と 11 例の写實的表現を見た。

次に本来野生の植物であり、荒野を偲ばせ寂しさを想起するヒース茂れる荒野を含めてのヒース (heath) に移りたい。Brontë の *Wuthering Heights* や Hardy の Egdon Heath の叙景を持ち出すまでもなくイギリス、アメリカを問わず詩や小説でヒースおい茂れる荒野に関連したものは数えきれない。花言葉が solitude となっていることから理解できるようにこの種の意味に用いられることが圧倒的に多く、Wordsworth も又しかりである。

How soon my Lucy's race was run !

She died, and left to me

This heath, this calm, and quiet scene…³⁰⁾

愛する Lucy に死別した詩人に残されたものは目の前の穏かで何事もなかったかの如きヒースのある谷間の景色である。死が自然の意であるかのように自然は表情を変えない。静かであるだけに一層このヒースのかもしだす零囲気は詩人の心境を強調して効果的である。又耕作のできなくなったヒース茂れるこの土地は何の役にもたたないという

This scrap of land he from the heath

Enclosed when he was stronger ;

But what to them avails the land

Which he can till no longer ?³¹⁾

29) *The Primrose of the Rock*, 5—6.

30) “Three years she grew in sun and shower,” 38—40.

31) *Simon Lee*, 45—48.

においては、元気な人間の耕すヒースの地は野性味あふれる感じを与える一方、老衰して今や荒れるにまかせたヒースの地は人生の終りという荒涼とした感じを与えるのに効果的である。

Appalling process! I have marked
The like on heath, in lonely wood;
And, verily, have seldom met
A spectacle more hideous—yet
It suited Peter's present mood.³²⁾

上記詩行は古い Peter がいろいろの精神的動揺を続けながら崩壊していく過程を描いた所であり、この状景は Peter のその時の気持ちにぴったりであったと述べているが、ここに出てくるヒースも荒涼とした雰囲気を出す効果を狙っての設定であるように思える。又 Esthwaite 湖畔に来た婦人が2人の子供をかかえ疲れと寒さに悩まされ、子供達がついにはあえない最後を遂げる “All blind she wilders o'er the lightless heath, / Led by Fear's cold wet hand, and dogg'd by Death;”³³⁾ においてのヒースの使用も自然の厳しさを象徴していると同時に彼女の苦悩の反映と受け取れるのである。さて、一方ヒースは芝草のように茂りあっている所から行き暮れた旅人の褥になったり、家屋の中においてもその材料として用いられたらしく、 Wordsworth の詩中にも bed の代用としてのヒースの例が6例あった。例えば

Instantly throwing down my limbs at ease
Upon a bed of heath…³⁴⁾

とか

32) *Peter Bell*, 826—830.

33) *An Evening Walk* (1793), 285—286.

34) *The Excursion*, II, 350—351.

…within that hut

We might have made a kindly bed of heath…³⁵⁾

等である。その他ヒースは “withered” の epithet をつけそれを春が活気づけるということから冬を象徴したり、³⁶⁾ “trackless heath” と用いて汚れなき5月の爽かな清純さを象徴し、生命の燃えいずる喜びを感じさす表現とか、“Soft heath this elevated spot supplied…”³⁷⁾ のように風景が荘厳で、神に対して感謝の気持ちがあられる心境にあってはヒースも soft にならざるを得ないという “soft” な心の反映としての表現があった。尚ヒースに関しては修辭的表現10例、写實的表現16例に分類し得ると思う。

次に同じく野性の植物に対し、どのような態度をとっているかをもう一例ヨシ(reed)を採り上げ少し述べてみたい。我々がこの言葉で思いつく idiom に “lean upon a split reed” がある。*Isaiah* の “Lo, thou trustest in the staff of this broken reed, on Egypt…”³⁸⁾ に由来した言葉とも云われるが、Wordsworth の場合もこの「薄弱な人物に頼る」という意味に用いられている。

Am I then so soon

Forgotten? have my warnings passed so quickly

Out of thy mind? My dear, my only, Child;

Thou wouldst be leaning on a broken reed—

This Marmaduke—³⁹⁾

即ちかつての男爵で、パレスチナの戦いで妻を失い盲目となって帰国し、荒野をさまよう Herbert と娘の Idonea との対話の部分であるが、ここで彼は

35) *The Borderers*, 121—122.

36) Cf. *The Brownie's Cell*, 81.

37) *The Excursion*, IX, 580.

38) XXXVI, 6.

39) *The Borderers*, 161—165.

「万人の心喜ばせる人」と呼ばれる Marmaduke の性格を broken reed で表現している。非常に象徴的である。一方最も伝統的な使用の一つである「ふるえるアシ」を simile として用いている例も見受けられた。次の詩行

And all the people bow their heads, like reeds
To a soft breeze, in lowly adoration.⁴⁰⁾

がそうであるし、“…whispering like two reeds that in the cold moonbeam / Bend with the breeze their heads, beside a crystal stream.”⁴¹⁾ も又しかりである。この他人間の性状を示す simile として Dora Wordsworth の humility を示す次のような例も見受けられた――

High is her aim as heaven above,
And wide as ether her good-will;
And, like the lowly reed, her love
Can drink its nurture from the scantiest rill:⁴²⁾

更には reed は笛とか牧歌に言及して用いられている。しかし、日本の夏の季語としてある「青アシ」の意味ではほとんど使われていない。修辭的使用 4 例、写実的使用 6 例と見た。

花の具体的例証の対象として最後に Wordsworth 的色彩の強いユキノハナ (snowdrop) を採り上げてみたい。Fair Maid of February とか purification flower と呼ばれているこの花は、英国ではいたる所で賞されている。白く頭を垂れて咲く花の姿が哀れでしかも優しく、年の初花として珍重されていて、花を見ることのない雪の深い 1～2 月に咲く為に friend in need

40) *Ecclesiastical Sonnets*, Part II, XI. 7—8.

41) *The Armenian Lady's Love*, 95—96.

42) *The Triad*, 145—148.

とか、春を予期する花との意味で hope とか consolation の意味を含んでの使用が通例である。Wordsworthはこの花をも殊の外愛したらしく、例えばこの花の季節とその控え目にうつむいて咲く特徴とをよくあらわしている *To a Snowdrop* を書いている。

Nor will I then thy modest grace forget,
Chaste Snowdrop, venturous harbinger of Spring,
And pensive monitor of fleeting years!⁴³⁾

即ち彼の愛するユキノハナは慎み深い柔しい面影を持ち、頭を垂れて咲いている風勢があたかも物思いに沈んでいるかのようなのであるが為に pensive と呼んでいる。我々は Wordsworth が花に捧げている言葉から、彼が如何なる花を愛していたかを知ることができるのだが、例えば上記の詩行もその判断の一助となるものであろう。

I began
My story early, feeling as I fear,
The weakness of a human love, for days
Disown'd by memory, ere the birth of spring
Planting my snowdrops among winter snows.⁴⁴⁾

上記の詩行は幼い頃の出来事についての記憶の誤り又は錯覚を述べた所であるが、⁴⁵⁾ Wordsworth は “early” と関連づけ、幼い頃の美しい思い出をこのユキノハナにこめて春に咲くユキノハナが雪の中に咲いていたように思うと

43) *To a Snowdrop*, 12—14.

44) *The Prelude*, I, 640—644.

45) Cf. “A surprising phrase in the mouth of one who professed to remember many incidents of his boyhood in great detail.” (R. D. Havens, *The Mind of a Poet* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1941), II, 308).

の比喻（もっとも Wordsworth はこの比喻の弱さを了解していたようであるが）を用いて表現している。同じような例としては次のようなものもある。

When I behold thy blanched unwithered cheek,
 Thy temples fringed with locks of gleaming white,
 And head that droops because the soul is meek,
 Thee with the welcome Snowdrop I compare;
 That child of winter, prompting thoughts that climb⁴⁶⁾
 From desolation toward the genial prime...

即ち心やさしい白髪の Lady Fitzgerald のうつむいている様子をユキノハナを用いて効果的に表現している。Wordsworth は前にも少し触れたようにこの花が頭を垂れて謙虚なしおらしい様子をして咲いているので好きであったのである。ユキノハナの場合修辭的表現は3例、写實的表現は4例と読んだ。

さて、これ迄 Wordsworth がどのように花を使用し、いかなる意味をそれに持たせているかを知る為に rose, lily, primrose, heath, reed, snowdrop について断片的にはあるがその花（純粹には花とは云えぬものもあるが）の見出せる詩行を調べてきたが、一般的に云って写實的表現が多いことが理解し得る。しかし時にはその花の持つ表面的姿から飛翔し伝統にのっとった metaphor, symbol, simile としての利用から独自の効果を發揮しているものもあった。即ちこの種の詩中に見出される花の場合は、ある思想感情を表現する手段としての断片的描写も多々あると云えよう。

さて一方 Wordsworth にも勿論花そのものを対象にタイトルにあげて詠じた詩があり、花に対する彼の態度を知る上では見過ごすことができない。その意味で *To the Small Celandine* を採り上げることは部分的とはいえ役立つことと思える。元来この花はあまり英詩の中では採用されていないように思えるが彼のこの花に対する愛着は上記の詩以外に *To the Same Flower* (1802), *The Small Celandine* とあるようにかなりのもののように思える。

46) *To—, in Her Seventieth Year*, 6—11.

明らかにこの詩は単なる花の自然美を詠ずるといった写実的詩ではない。

Comfort have thou of thy merit,
 Kindly, unassuming Spirit!
 Careless of thy neighbourhood,
 Thou dost show thy pleasant face
 On the moor, and in the wood,
 In the lane;—there's not a place,
 Howsoever mean it be,
 But 'tis good enough for thee.⁴⁷⁾

即ち Wordsworth は花そのものの外観から入り、やがて評価に移っている。そしてこの花を称賛するのはその花が咲く場所を選ばず、人に褒めそやされることを求めず、人から加えられる危険を恐れず、名声欲にとりつかれている人間にではなく普通の人々から愛されることを望み、本当に己れの美を認識してくれる人にだけその美をおしげなく提供するという、主にこの花の humbleness, humility, generosity の高潔さのせいであるとし、更にこの花の本質を知り本当に喜ぶことのできるのは“thrifty cottager”⁴⁸⁾のような人種であるという。宗教的イメージが強くにじみでている。Wordsworth はこの花の花としての純粋な生き方に自己の理想を見出し、自分も詩人としてそうでありたいと願う気持ちを詠じているといえよう。と同時に彼自身も少年時代と異なった落ち着いた心でこのような花の美を味わい得ることを喜こんでいるわけである。さてこれと非常に類似した思想がヒナギク(daisy)に関する詩の中に見出される。Chaucer に始まり R. Burns が *To a Mountain Daisy* を書いて以来、ヒナギクは詩人達の愛する花となり John Ruskin が *Modern Painters* の中で大いに称賛したことは周知の事実であるが、Wordsworth も直接ヒナギクについては *To the Daisy* (“In youth from rock to rock I

47) *To the Small Celandine*, 41—48.

48) *Ibid.*, 37.

went” 及び “Bright Flower! whose home is everywhere”) と *To the Same Flower* の三篇の詩を書いている。彼はヒナギクが人間に対して寛大であるとし “Yet nothing daunted,/Nor grieved if thou be set at nought:⁴⁹⁾” と述ベスミレやバラに比してこの花の謙遜を喜び更に次のようにうたう。

Thou liv'st with less ambitious aim,
 Yet hast not gone without thy fame;
 Thou art indeed by many a claim
 The Poet's darling.⁵⁰⁾

そして “I drink out of an humbler urn / A lowlier pleasure…”⁵¹⁾ と普通の質素な生活の喜びの大切さを述べ、更にヒナギクが自分に多くの贈物をしてくれたことを感謝し、この common flower との交流において発見した富は口では云い表わせぬほどであるという。特に “A happy, genial influence⁵²⁾” のような贈物を受けたと述べるころまで来ると、神の意識を含めてこの humble の意味をいかに深く又貴重なものと彼が考えていたかが理解しえる。一方同じヒナギクを取り扱った *To the Same Flower* では Wordsworth はヒナギクという目前の实在を離れて nun, maiden, queen, starveling, cyclops, faery と等しいものの迅速な啓示である比喻を通して空想を飛翔させる。彼の空想は物の性質が一つに化合されないようなイメージを作り、豹変して停止することを知らぬ軽妙さを示す。しかし矢張り中心となるのは実質の把握である。

Thou unassuming Common-place
 Of Nature, with that homely face,

49) “In youth from rock to rock I went,” 20—21.

50) *Ibid.*, 29—32.

51) *Ibid.*, 51—52.

52) *Ibid.*, 70.

And yet with something of a grace
Which love makes for thee!⁵³⁾

そしてヒナギクの精神的道徳的教訓に思いを馳せ、使徒的作用をこの花の質素な輝きの中に見出し、結局は“flower”と呼ぶのが一番ふさわしいのだと云う。⁵⁴⁾

Bright *Flower*! for by that name at last,
When all my reveries are past,
I call thee, and to that cleave fast,
Sweet silent creature!⁵⁵⁾

正にこの“flower”は Wordsworth の花に対する経験の全体を象徴しているところの心の底から発した言葉であろう。あの水仙の歌において彼は感覚を超えて聖なるものに入ろうとしたように、物の本質を追求し常に真髄に帰着する彼の特性がここにおいても現われているといえよう。

Wordsworth は花とか小鳥にはあまり興味を示さず、若しそれらが主題として詠じられている場合は、ある程度迄それが妹 Dorothy を喜ばせるであろうことを彼が知っていたからであるとの意見もある。確かに花は Wordsworth の場合、中心テーマの範疇に入らぬものの一つかも知れない。しかし矢張り花は人間の感情を育てる偉大な師であり、彼もその恩恵に浴した一人であったことは間違いあるまい。そして彼はその花の美を認識しながらも、ただ讚美するのみではなく、はたまた伝統的描写に止まることなくその生命と一体となり感謝を込めてその無限の解釈に力を注いでいることがあるように思える。

53) *To the Same Flower*, 5—8.

54) Cf. R. Marsh, *Wordsworth's Imagery* (New Haven: Yale University Press, 1952), p. 46.

55) *To the Same Flower*, 41—44.

紙面の都合上わずかの花しかとりあげることができなかったし、そのわずかの例から結論めいたことを云うのは大胆と非難されるかも知れぬ。しかし表面的価値を超え内面的価値を洞察することによる無限の意味をかもしだす花こそが Wordsworth 的花と云えるのではないだろうか。

To me the meanest flower that blows can give
Thoughts that do often lie too deep for tears.⁵⁶⁾

花より智慧を得る術を知る人は最も幸福な人であるという言葉があるが Wordsworth もその一人であることに間違いはあるまい。

56) *Immortality Ode*, 206—207.

Wordsworth の作品に出る花（植物）及びそれに類するものとその回数

acacia	（アカシア）	（ 1）
alder	（カワラハンノキ）	（ 6）
amaranth	（アマランス）	（ 2）
apple	（リンゴ（の木））	（ 8）
ash	（西洋トネリコ）	（15）
aspen	（ポプラの類（ヘコヤナギ））	（ 6）
beech	（ブ ナ）	（ 5）
bind-weed	（ヒルガオの類）	（ 1）
birch	（樺）	（14）
box wood	（黄 楊）	（ 1）
bramble	（茨）	（ 7）
broom	（エニシダ）	（13）
buttercup	（キンポウゲの類）	（ 1）
beeches	（ブ ナ）	（ 4）
carnation	（カーネーション）	（ 2）
cedar	（ヒマラヤスギ）	（ 6）
celandine	（クサノオウ（キンポウゲの一種））	（ 4）
cherry	（サクラの木）	（ 5）
chestnut	（クリの木）	（ 7）
citron	（丸ブシュカン）	（ 1）
clover	（クローバー）	（ 1）
corn	（麦（英））	（16）
cowslip	（キバナノクリンザクラ）	（ 1）
crocus	（クロッカス）	（ 1）
cuckoo-flower	（ウマノアシガタ）	（ 1）
currant	（スグリ）	（ 2）
cypress	（イトスギ）	（ 6）
daisy	（ヒナギク）	（18）
daffodil	（キズイセン）	（ 3）
dandelion	（タンポポ）	（ 2）
eglantine	（野バラ）	（ 4）
elder	（ニハトコ）	（ 4）
elm	（榆）	（21）
eyebright	（コゴメグサ）	（ 1）

fern	(シダ類)	(18)
fern, Osmunda	(ゼンマイ)	(1)
fig	(イチジクの木)	(1)
fir	(モ ミ)	(2)
flax	(ア マ)	(1)
forget-me-not	(勿忘草)	(1)
furze	(ハリエニシダ)	(7)
gooseberry	(西洋スグリ(グズベリ))	(1)
harebell	(イトシャジン)	(3)
hawthorn	(サンザシ)	(20)
hazel	(ムラサキハシバミ)	(7)
heart's ease	(=pansy)	(1)
heath (heather 含)	(ヒース)	(29)
hemlock	(毒人参)	(1)
hemp	(ア サ)	(2)
holly	(西洋ヒイラギ)	(14)
honeysuckle	(スイカズラ)	(2)
hyacinth	(ヒヤシンス)	(1)
hyssop	(ヒソップ草(はっかの一種))	(1)
iris	(イチハツ, アヤメ属)	(1)
ivy	(ツ タ)	(15)
jasmine	(ジャスミン属)	(2)
jonquil	(黄ズイセン)	(1)
juniper	(杜 松)	(1)
kingcup	(=Buttercup)	(2)
larch	(落葉松)	(3)
laurel	(月桂樹)	(9)
lichen	(地衣, 青苔)	(3)
lily (lily of the valley 含)	(百合, スズラン)	(26)
lime tree	(シナの木)	(1)
lotus	(蓮 花)	(1)
love-lies-bleeding	(ヒモゲイトウ)	(2)
magnolia	(ハクモクレン)	(1)
maize	(玉蜀黍)	(1)
maple	(カエデ)	(5)
marsh marigold	(リユウキンカ)	(1)

moss	(コ ケ)	(36)
mountain ash	(ナナカマド)	(1)
mulberry tree	(クワの木)	(1)
myrtle	(テンニンカ)	(13)
nightshade	(ナス属)	(5)
oak	(オークの木(カシ, ナラ))	(52)
olive	(オリーブの木)	(9)
orange	(密 柑)	(6)
osier	(カワヤナギ)	(1)
palm	(シユロ)	(11)
pansy	(三色スマレ)	(3)
pea	(エンドウ)	(4)
peach	(モ モ)	(1)
pear	(西洋ナシ)	(3)
periwinkle	(ツルニチソウ)	(1)
pine	(松)	(47)
pink	(石竹, なでしこ)	(1)
plane tree	(スズカケの木)	(1)
poor robin (wild geranium)	(野性テンジクアオイ)	(2)
poplar	(白 楊)	(2)
poppy	(ケ シ)	(3)
primrose	(桜 草)	(18)
reed	(ヨシ, アシ)	(10)
rose	(バ ラ)	(43)
saffron	(サフラン)	(1)
snowdrop	(ユキノハナ)	(7)
speedwell	(クワガタソウ属)	(1)
stonecrop	(ベンケイソウ)	(1)
straw	(麦類のワラ)	(12)
strawberry	(イチゴ)	(11)
sycamore	(イチヂクの類)	(8)
thistle	(アザミ)	(8)
thorn	(イバラ)	(43)
thrift	(ハナカンザシ)	(1)
thyme	(タチジャコウソウ)	(5)
valerian	- (ハルオミナエシ)	(1)

vine	(ブドウの蔓)	(13)
violet	(ニオイスマイレ)	(12)
wallflower	(ニオイアラセイトウ)	(1)
walnut	(クルミ)	(1)
water-lily	(スイレン)	(2)
willow	(ヤナギソウ)	(20)
woodbine	(忍 冬)	(8)
yew	(イチイ)	(23)
flower	(花)	(400)
weed	(雑 草)	(48)
tree	(木)	(318)

注

このリストを作成するにあたり次の諸書を参照した。

- B.E. Nicholson, M. Wallis, E. B. Anderson, A. P. Balfour, M. Fish and V. Finnis, *The Oxford Book of Garden Flowers* (London : OUP, 1964) .
- B. E. Nicholson, S. Ary and M. Gregory, *The Oxford Book of Wild Flower* (London : OUP, 1960) .
- Lane Cooper, ed., *A Concordance to the Poems of William Wordsworth*. (London : Smith, Elder, 1911) .
- J. R. Tutin, *The Wordsworth Dictionary of Persons and Places* (London:Johnson Reprint Corporation, 1891) .
- 石川林四郎, 「英文学に現われたる花の研究」 (東京:研究社, 大正13年).

尚本論文における Wordsworth の作品からの引用は総て下記の二書による。

- The Prelude or Growth of a Poet's Mind* (Text of 1805), ed. E. de Selincourt (Oxford : Clarendon Press, 1959).
- The Poetical Works of William Wordsworth*, 5 vols., ed. E. de Selincourt and H. Darbishire (Oxford: Clarendon Press, 1954).